

自らの生から公共の知を共創する 次世代市民の育成に向けた教育の開発

Development of Educational Curriculum and Programs for the Citizen of Next-generations who can co-create public knowledge based on their own life experiences

研究代表者 岡部美香(人間科学研究科 教授)

研究協力者

[学内] 阪戸斗羽(人間科学研究科 博士前期課程) 高木万由葉(人間科学研究科 博士前期課程)

高木琳太郎(人間科学研究科 博士前期課程) 中村晃輔(人間科学部) 伊藤武志(社会ソリューションイニシアティブ 教授)

今井貴代子(人間科学研究科 特任講師)

[学外] 古波蔵香(福岡教育大学 講師) 増田叶夢(福井県高等学校 教諭) 小川竜牙(茨城県小学校 教諭)

共同研究機関・連携機関

大阪府教育庁 大阪府立天王寺高等学校 大阪府守口市立さつき学園夜間学級

1. プロジェクト概要

「当事者参加型」の教育とそれを通して「市民参加型」の社会を構想・構築する——これが、私たちのプロジェクトのめざすところです。そのためには、従来の社会で使用され続けてきたものの、すでに現実に即さず機能不全を起こしているカテゴリー分けやシステムの区分を問い直す必要があります。

この問い直しにおいて重要なのは、教科書や行政文書、マスコミなどオーソリティによる「借り物」の言葉ではなく、市民が自らの生に根ざして共創する〈ことば〉を重視することです。そして、その〈ことば〉を〈公共の知〉として協働的に醸成できる市民を育成することです。

本プロジェクトでは、この4年間、こうした問い直しのための理論的・実践的な試みを展開してきました。最終年度にあたる2025年度は、市民である子どもたちが共創する〈ことば〉を〈公共の知〉とする教育カリキュラム・プログラムを実践・発展させました。



2. 2025年の取り組みと成果とプロジェクトの今後

① 夜間中学における取り組み

大阪大学人間科学部・人間科学研究科に所属する留学生が、夜間中学

(大阪府守口市立守口さつき学園夜間学級)の「総合的な学習の時間」の講師となり、国内のグローバル化に対応した国際理解・交流の場を開くプログラムを構築しました。2025年度は、インドネシアおよびベトナムにルーツをもつ学部生と大学院生が講師を務めました。インドネシア出身の留学生による授業では、日本人大学院生が通訳および機器操作のサポートを行い、協働的な授業運営を実現しました。これらの取り組みは、夜間中学生にとっての国際理解の深化にとどまらず、留学生にとっても日本社会や教育の多様性を学ぶ機会となっています。来年度以降も、このプログラムを継続し、相互学習の場として発展させていく予定です。

② SDGs教育をこえて「いのち」を思考する教育へ

SDGs、そして大阪大学が関西経済3団体とともに発起した「いのち会議」がめざすのは、すべての人びとの生(生命・生活・人生)が生き生きと活きる社会です。そのような未来社会を構想し、構築していくためには、未来の社会を担う「当事者」である子どもたちが、その過程に主体的に参加していることが重要です。その際には、子どもたちが自らの実感に根ざし、他者と協働するための〈ことば〉と思考を学ぶことが不可欠です。2025年度は、これらの点を特に意識して以下の教育プログラムを設計・調整し、実践しました。

(a) 大学生による「いのちの声」発信プログラム

大阪大学の大学生6人が参加し、まず「探究」とは何かについてのレクチャーを受けた後、自ら実際に探究を行い、自分たちの〈ことば〉で「いのちの声」を作成・発信しました。その際、SDGsの歴史について協働で調べ学習を行い、そこで得た理論的知見に基づきつつ、SDGsの社会的意義と今日的課題について、



自らの思考を、議論を通して多角的に省察しました。

この過程では、既成のオーソリティの思考枠組みや言葉に依拠するのではなく、自分たちの〈ことば〉で思考し、発信することを重視しました。自らの思考と〈ことば〉を協働で磨き上げるこの活動は、今後も大阪大学人間科学部で開講されている「教育人間学演習Ⅰ」において継続される予定です。

(b) 高校生対象、大学生・大学院生による「SDGsのその先をアカデミックに探究しよう！」

上記(a)に参加した大学生と大学院生が、大阪府立天王寺高等学校と連携し、高校生を対象とした、人文学・社会科学系の探究力を養成するためのプログラムを協働で開発・実践しました。本プログラムの目的は、SDGsの歴史や目標・内容を問い直すことを通じて、「テンプレート」や「正解」をあらかじめ想定せず、他者との議論を通じて、探究において最も重要な「問いを立てる」というプロセスを体験することにあります。

2025年度は、高校生が夏休み以降に本格化する探究学習に円滑に移行できるよう、「問いを立てる」体験を行う時期を意図的に早めました。昨年度は8月に実施していたプログラムを、今年度は6月28日、6月29日、7月5日に実施しました。本プログラムには31人の高校生が参加し、SDGsの問い直しを踏まえただけで、SDGsを乗り越える「いのちの声」を作成しました。また、8月8日に実施した大阪大学附属図書館ツアーには26人の高校生が参加しました。いずれの取り組みにおいても、昨年度を上回る参加がありました。さらに、11月18日には天王寺高校における探究学習の中間発表会に出席し、大学院生と岡部が指導助言を

「当事者参加型」の教育・福祉を通して 「市民参加型」の社会を構想・構築する



行いました。その後も、オンラインでの連絡を通じて、継続的に探究活動の相談に応じています。

これらのプログラム、図書館ツアー、探究活動への支援は、今後も天王寺高校と連携しながら毎年継続し、いのちが生き生きと活きる社会の構築に主体的に参加できる、〈自分のことば〉で語りつつ他者と協働できる次世代の育成に貢献したいと考えています。

そのためには、大人はもちろん、高校生や大学生・大学院生も、日常生活や学校教育を通して身につけてきた「技術的合理性」「有用性」「高効率性」という価値基準をいちどアンラーニングする必要があります。この点は昨年度の報告書でも指摘しました。2025年度はまず理論的研究を進め、その成果を2025年12月9日にオーストラリア・パースで開催されたPhilosophy of Education Society of Australasiaにおいて発表しました。今後は、この理論的研究をさらに深化させるとともに、これまで蓄積してきた実践研究と往還させながら、教育現場への応用可能性を具体的に検討していきたいと考えています。